小松帯刀と新時代——国際法・印刷・教育・科学

根占献一

「想像力に非常に富んでいるところは、日本人とイタリア人はよく似ている。」（ヴィレム・ホイセン・ファン・カッテンディーケ[1]）

はじめに

本論は薩摩藩家老小松帯刀（清廉。一八三五－一八七〇）に関わる小考であり、これまでも主題に沿った拙文を綴ってきた[2]。急速な転換期の幕末・明治維新期の時代には夥しい数の人物たちが登場する。このためプロソポグラフィ（prosopography）な手法を交えた当該研究が欠かせないのではないかと思われる。一研究者が全体を見廻す史眼に到達することは容易なわざではないにしても、この作業はある意味では政治史的視点だけに留まらず、文化史的観点を蔑ろにせずに時代へ接近することでもあろう。

この点で大久保利謙（一九〇〇－一九九五）の研究から学ぶことは多くあり、幸いに、今日その業績は『大久保利謙著作集』（吉川弘文館、全八巻、一九八六－一九九三年）として包摂されている。本稿のために上野景範、五代友厚や何礼之に関して学術的知見を得ることができた。彼らの業績と行動はその第五巻「幕末維新の洋学」で検討されている。そしてこの巻の解説を書いているのが安岡昭男である。それは実に客観的に記されており、後学の者には役立つところが大いにあった。のみならず、大久保が見落としていた重要な文献が挙がっている。特に五代友厚と石河確太郎[3]の場合がこれに該当する。石河のことはさておき、五代に関しては拙論でしばしば名を出すことになろう。

思うに、大久保は利通の実の孫として祖父に身近な人物たちに自ずと関心を抱くとともに、彼らの同時代人としての父祖とその時代を広範に捉え、努めて客観的、学術的に踏査し、往時の認識を深めようとした研究者であった。一般的にはこの時代はかなりポピュラーな時代となり、西郷隆盛と坂本龍馬、近藤勇らに代表されるドラマや小説の「英雄たち」が幅を利かせて、ヒートしているのが現状である。それだけにその研究は「解熱剤」の効能さえあるだろう。

本年二〇一八年は明治維新一五〇年。明治維新百年の時は高校生であった。ＮＨＫ大河ドラマで言えば、今回は「西郷どん」、かつては「三姉妹」。今度は「英雄史観」が鼻に付き、全く見ていないのだが、その半世紀は瞬く間に過ぎた。「降る雪や明治は遠くなりにけり」と昭和の初めでさえも俳人草田男にはそのように感じられた明治の世。それでは果たして明治維新期は隔たってしまっただろうかと思う。何故なら、大戦争終結後に百年目は来たが、維新十年後の一八七七年、明治十年の西南戦争を知っている人さえ身近にいたからである。一八六〇年生まれの私の曾祖母は物心つくまで健在で、西南戦争時の西郷の思い出を語ってくれた。

そのような私事は脇に置いて、以下、小松自身と同時代人の言動、並びにその関係のなかで、特に文化人・知識人としての側面を帯刀の中に見ていきたい。

（一）小松帯刀、福沢諭吉と丸山真男―国際法の認識問題

今回は主に書き溜めてきたメモワールを活字化する作業である。その引用は多くが間接的で、出処元を確認する余裕がなく、不正確な箇所があるかもしれない。他方で、小松帯刀の言あるいは小松に関わる言を引用する者と彼との関係にはまた、それ自体注視すべき点があろう。その一端を先ず初めに示したい。丸山真男はその一例ながら好例となろう。

幕末に至って四囲の状況が急転し、厳しい外国交際、国際関係に直面するなかで、小松を含む当時の日本の指導者たちには国際法理解が緊急課題となっていた。これは周知の話であるが、丸山が国際法受容史のなかで朱子学が果たした意義について触れる際、小松の名を出していて印象深い。

…いかに程朱学が国際法の理解の媒介になったかが明白であるし、小松帯刀が『万国公法和解』に題辞して、「弱肉強食の禍蔓延す、願くば私欲を去りて公法を存し」云々といっているのも、「天理」―「私欲」という朱子学の対立的範疇が視座となっていることを示している[4]。

今、『万国公法和解』を紐解く時間はなく、引用文中の『万国公法和解』が『和解万国公法』なのか、それとも『和訳万国公法』（重野安繹訳述）なのか、目下正式題名不明とするも[5]、ホイートンの著書からのこの引用は二重の意味で興味深い。ひとつは、小松自らが大いに尽力した大政奉還達成後、事態は王政復古に進み、内乱状態となる。そのようななか、外交上の責任者、外国官副知事として小松は外国交際をなによりも真剣に考える立場にあった。陸奥宗光（一八四四－一八九七）はこの点で重視された一人であったろう[6]。陸奥は徳川御三家の一門紀州の出であるが、時に土佐藩、時に薩摩藩と所属を移している。後述する国際港長崎の地に縁が深かった人物でもあった。外交ではまた佐賀藩士大隈重信（一八三八－一九二二）を抜擢し、外国官副知事に任じたのは帯刀であった。これは、薩摩藩家老の小松には人を見る眼があり、公平無私な性格だったと評されている所以となっている。そしてこれには政治に限らず、長崎を中心としたキリスト教解禁という宗教問題も含まれていた。薩摩藩士中井弘（弘藏。一八三九－一八九四）はこのために動いてくれた一人であったろう。小松の判断は木戸孝允よりも穏便でバランスが取れていたと見られている[7]。

もうひとつは、近世日本の朱子学に精通していた政治思想学者丸山が小松の言を挙げているという、そのことである。丸山は深く福沢諭吉（一八三五－一九〇一）に傾倒していたが[8]、小松はこの福沢と同年生まれであり、歴史的人物としての小松の人となりを丸山は知っていたということになろう。ここでは本論の性格上、小松と福沢との関係がどのようであったかは不問に付すにしても、時代の傾向を知るうえで両人間には共通性が見られることを指摘しておきたい。それは封建制的伝統を打破しようとする思考法である。

小松と知り合いであり、ともに国務に勤しんだ伊達宗城（一八一八－一八九二）の四男が中津藩主奥平昌邁（一八五五－一八八四）となっていたが、福沢はその家臣であった。『福翁自伝』では藩主家門への軽侮は凄まじく、『文明論之概略』でも能力に基づかず、単に門閥による社会構成となっている点を福沢は断固、侮蔑、否定してやまない。明治初年までの十数年間を多事多難な時代と述懐している福沢であるが、それはまさに小松の活動期と一致している。

岩下方平らの薩摩藩関係者の名前は先の自伝に出てくるものの、未

だ小松の名が見える福沢の文自体には行きあたっていない。五代友厚（一八三六－一八八五）と松木弘安（寺島宗則。一八三二－一八九三）は小松の側近グループに入るが、松木は福沢とは非常に親しかった。同じ薩摩藩でも、松木は五代同様、武断派の西郷隆盛（一八二八－一八七七）や大久保利通（一八三〇－一八七八）とは立場が随分と異なっており、蘭学を学んだことや海外に出たことが大きかったろう。

福沢が閥族の依拠する封建制と彼らの教養と道徳心の根源にある儒教主義[9]とを毛嫌いしていることは、どの著作からも容易に窺われる。氏素性だけで高い地位にあるものを罵倒する批判・独立の精神は、実に小気味よい。だが、閥族階層に属する小松は彼の批判の対象にはならなかったであろう。アーネスト・サトウ（一八四三－一九二九）の小松評には福沢も異論はなかったであろう。「小松は私の知っている日本人の中で一番魅力ある人物で、家老の家柄だが、そういう階級の人間に似合わず、政治的才能があり、態度が人に優れ、それに友情に厚く、そんな点で人々に傑出していた」[10]。

（二）小松帯刀と薩摩藩士重野安繹―文化的伝統の道

前節でこの時代によく読まれていた書籍の数々が挙がった。それらがどこでどのように印刷されたかはまた、この時代らしい特性を示している。このことは「活版印刷」草創期を辿ることになろう。

いきなり小松帯刀の早世となるのだが、彼が亡くなったところは大阪（大坂）であった。この大阪の地は遠い鹿児島から、急速に利便可能となった蒸気船でたどり着けるようになった地であり、また京都に上るには絶好の中継点であった。京都は長く文化都市としての性格を持ち続けてきたが、幕末の開国後は日本の政治都市へと大変貌を遂げた。徳川最後の将軍慶喜は京に釘付けとなり、在職中一度も江戸城には登城できなかった。慶喜がいるところは二条城であり、大阪城であって、江戸城ではなかった。

ところで、小松の弔辞を取り計らったのは、その家臣重野安繹（厚之丞。一八二七－一九一〇）である。名文家であったのだろう。後年、歴史家として名を挙げる漢学者重野は家老より八歳の年長者であり、長命を保ち、一九一〇年に死去した[11]。明治三年に死去した小松の没後四〇年目のことで、明治もあと二年残すのみであった。大阪で息を引き取る間際まで小松ととりわけ縁が深かったのは、重野と同じく薩摩藩士の家臣、五代友厚（一八三六－一八八五）である。京より大阪に首都を移転する計画があった時代に水を得た魚のようにこの商都で一頭地を抜く活躍をし、今日でも大阪経済界の基盤を造った先人として尊敬されている。

先ず小松と重野のエピソードを紹介したい。これを教えてくれるのは、興味深い論考、北野克「「小松帯刀書簡」について―重野安繹先生添創詠草」である。あまり知られているエッセーでないのではないか。それは、『田山方南先生華甲記念論文集』（田山方南先生華甲記念會刊、昭和三八年十月六日）に所収された論文の一本で、序文は松永安左エ門、巻頭論文は坂本太郎が草し、錚々たる執筆者が続く。その中に竹内理三の名もある。華甲とは還暦と同義語である。田山方南の本名は信郎で文部省国宝監査官とある。今でもこの公職があるかどうかは不明だが、呼び名が変わって存続しているかもしれない。華甲同様、普段目にする字ではない。

筆者の北野克（たゆる。一九〇四－一九九二）は古筆学・国文学の専門家。彼が論を世に出した年、昭和三八年は西暦では一九六三年であり、今となってはかなりの昔となる。小松宗家をじかに知り、史料を持つ者だけが執筆できる独特の論考が紹介のものであり、ここでは、

帯刀が読んだ歌を重野安繹に添削依頼した書簡と添削詠草一通が話題になっている。小松の歌道師匠は八田知紀（一七九九－一八七三）で、小松は自ら観瀾と号し、心から歌を楽しんだし、いかなる状況にあっても、最期まで作歌を好んだ[12]。薩摩の武門を代表する家に生まれただけでなく、歌道に通じていた文化人でもあればこそ、長く滞在した京都で公家や徳川家歴代将軍、家茂やとりわけ慶喜と親交を持つことができたゆえんは、このような嗜みが功を奏した面もあったであろう。

ところで、このような珍しい収録先の論をどうして知ることができたのだろうか。おそらくは『禰寝文書』（根占＝小松家文書）研究の第一人者だった川添昭二が北野の名を挙げている論考に出会ったことがあったのではなかろうか。九州大学で竹内の指導を受けた川添は本年（二〇一八年）三月に死去した。小松については次の言を残している。

（鹿児島市）鶴丸城の前通り一帯は上級武士が住んでいました。いまの山下町の東郵便局の地には家老の小松帯刀清廉の邸宅がありました。小松氏は大隅国禰寝氏の子孫で日置郡日吉町吉利に移され、そこを本拠としていました。小松帯刀は大久保利通や西郷隆盛などとともに幕末薩摩藩の政治・軍事をにない、長州・土佐と盟約をむすび、徳川慶喜に大政奉還を進言してその実現をみています。三六歳の若さで病死します。その事績は大久保や西郷の陰にかくされていてよいものではありません[13]。

このように喝破されていて、至言であろう。小松邸宅の地には今は主であった小松帯刀の銅像が立ち、大政奉還を求める姿となっている。やや離れて高いところには西郷隆盛の銅像があり、向かい合っている。もう一点、小松帯刀と重野安繹の関係を伝えるエピソードがあるが、これには彼らを取り持つ五代友厚の名を出さなくてはならない。それは日本における活版印刷揺籃期の一歴史でもある。

五代友厚が大阪から長崎の出版業兼書肆と考えられる大村屋に出した書状（明治三年三月一九日付）によると、小松家所蔵の『二十一史略』を活版印刷し出版する計画を立て、それは漢文学に通じた重野に相談の上で決められたというのである。『史記』から『元史』までの正史『二十一史略』は近頃流行している支那の歴史叢書であるが、大阪では入手しがたく、しかも高価なので公刊を思い付いた。この年の夏に小松は世を去るので、この話はその数か月前のことになる。金銭的に苦労していた小松のために一肌脱いで助ける意味も事業家五代の頭にはあったのであろう。小松はかつて薩英戦争後の五代の身を非常に案じ、長崎から上海に渡れるように配慮したことがあった。思うに、この渡海案は唐突な話でなく、五代にはこれ以前、上海滞在の経験があったからであり、この時高杉晋作と知己の間柄になっていた[14]。

大村屋は実際には販売を請け合わなかったが、そもそも五代はどのようにして歴史書を印刷しようとしていたのか。そこで登場するのが本木昌造である。次節で少々本木の長崎時代の初めから話を始めることにしよう。

（三）小松帯刀と薩摩藩士五代友厚、長崎の人本木昌造

小松が地元鹿児島と京都、大阪、東京以外で文字通り大きな足跡を残している町はここ長崎である。長崎は近代の活版印刷の先駆者となる本木昌造（昌三。一八二四－一八七五）の故郷だった。本木は、平戸の葡萄牙通詞の流れを引く長崎の阿蘭陀通詞の出で、長崎海軍伝習所でも通弁官を務めていた。このため小松との関係は早くから始まっていた可能性があり、同じく長崎滞在の多かった五代との関係も同断

であろう。五代の場合はさらに親交に近かったろう。何故ならば、同伝習所に薩摩藩から送られた一人がこの五代であり[15]、五代は本木とは言わば同じ釜の飯を食った間柄だったからである。長崎の町は起伏に富むとはいえ、その市街地は狭く人々の交流は親密度を高める。

海軍伝習所と活版がどうして結び付くのか。同伝習所には数々の分野の教師がいたのだが、来日したオランダ海軍公募の専門技術者の中に活版術の新製植字法を教えるインデルマウンが含まれていたからである[16]。海運術にも長けていた本木はすでに二〇代の頃から、通訳の公務の傍ら活字技術取得に精を出していたことが分かっている。そしてゆくゆくは時代のニーズが増えることを見込んで事業化することを考えていたことであろう。商才は五代に譲るとはいえども、この本木は実に多面的な才を持った人物だった。

海軍伝習所は安政二年、一八五五年に始まり、早くも安政六年、一八五九年に閉鎖されるものの、併設されていた長崎製鉄所は続き、それはまた長崎造船所の前身となった[17]。これと関連する船舶のための小菅ドック、通称小菅ソロバンドックは今日、小松帯刀、五代友厚、そしてトーマス・グラヴァーの名とともに記憶されている[18]。本木が伝習所で活版術技術を深めた意義は大きく、明治二年（一八六九年）になると、浄財などをもとに新街私塾（現長崎県市町村職員共済会館）を開設、また製鉄所付属の活版伝習所（唐通事会所跡。現長崎市立図書館）を設立した。翌年には新街私塾内に新町活版所を併設し、民間経営に乗り出した。これは日本初の民間活版事業の始まりをなす。続いて、彼の活版印刷所は大阪、横浜、京都、そして東京に生まれていく。

この発展にはもう一つ、本木が上海よりウイリアム・ガンブル（ギャンブル）を招き、ガンブルより電胎鋳造母型による活字製造法を習得していたことが著しく預かっている。上海はこの頃、印刷業の一大中心地となっており、日本との関係も深く、注目に値する。西南九州からはこの地は遠くなく、様々な点で繋がりができた町となっていた。また薩摩藩の所有する、上海より輸入した洋式活字と印刷機は重野安嗣を介して本木にわたるのだが、これは池原香穑（一八三〇－一八八四）が取りもった情報のようである[19]。書に秀でていた地元長崎の眼科医であった池原は本木とは長崎（崎陽）歌壇の仲間でもあり、元は吉田松陰と親しかった勤皇の志士であった。歌の道では高崎正風（一八三六－一九一二）について学び、有名である。高崎の師は八田知紀であり、八田はまた小松の師でもあったことは先述した。

小菅ドック、通称ソロバンドック（筆者撮影）

ところで、この活字が当時至る所に完璧にあったわけではなかった。本木に宛てた書状の中で、五代は前述した『二十一史略』を大阪で印行するために必要な活字は、長崎から持参して上阪してほしいと付け加えている。このため本木は印刷技術を併せ持つ弟子たち、酒井正三と小幡正蔵を大阪に送り込むことになる。この書状が明治三年三月一九日の日付を持つことはすでに述べた。これに関係する重野の五

代宛書簡も残っていて、それは三月一一日の日付を持ち、重野が小松から『二十一史略』の相談を受けていたことが分かる内容となっている。これを受けて重野は五代に相談し、先のような本木宛の五代の書状となったのであろう。

小松は時代の最先端の医療技術を受けるためにも当地大阪にいて、旧知の重野や五代に会う機会も多かった。宿痾に苦しむ小松はすでに前年の明治二年、一八六九年の五月に官吏公選により全職を免じられていた。小松が待ち望んでいたこの刊行物は彼の病勢との競争だったのかもしれない。それ故、五代の書簡から推し量ると、この『二十一史略』は急な話であったのかもしれない。何故なら、大阪で発行する予定の新聞については後回しで構わない、と書いているからである。新聞事業については、明治三年一月長崎に立ち寄った五代は本木と大村屋に大阪での新聞発行を持ちかけていた。これを受けて本木は懇意にしていた大阪の長崎屋宗三郎と田村良助に連絡を入れて、五代との間でこの件は進行中であった。

当事者同士のこのような往き来については、古谷昌二が丹念に調査し、また大阪の印刷所開設にあたっては本木の覚書（国立公文書館マイクロフィルム）を紹介している。以下、同氏の要点のうち拙文に関わる番号の個所をそのまま引用する。本の題名はそのままである。①大阪府の御用活版所として設立し、本木昌造（元木と表記）が全てを手配すること。②『二十一史』の校合・句読を重野安繹にお願いすること。③活字数が揃ったら、期限を定めて『二十一史』を印刷し、利益は二分割すること。④『二十一史』を出版するまでは、その他の書籍売上高の五歩を上納すること[20]。

五代の出資を得て、ちょっとややこしい話だが、長崎の大村屋は降りて大阪の長崎屋宗三郎方に活版所（大手通三丁目）が開設されて印刷態勢に入ったのは小松の生前であったろう。ただ、結局『二十一史略』は公刊されることはなかったようだ。

こと史書の近代印刷に限っても、小松と五代との関係はこれだけに留まらない。大坂活版所で、五代は『英和対訳袖珍辞書』の第三版にあたる通称『薩摩辞書』を堀孝之（一九一一年、明治四四年死去）に任せて、さらに増補改訂し印刷しようとした。元は上海で印刷されており、五代は小松に頼まれその売り捌きに尽力したことがあった。日本のほうで印刷したほうが便利かと思われたが、「新版」も結局上海で印刷されたのは、出版史の興味深いエピソードである。

（四）小松帯刀と何礼之―近代高等教育計画

大政奉還後、小松の体調は芳しくなかった。大阪ではオランダ人医師アントニウス・ボードウィン（ボードワン。一八二〇－一八八五）から最新の治療を受けながらも、当地で命を落とすことになる。他方で、逆説的とはいえ、小松には大阪大学医学部創設に関わる命の余力が残されていた。のみならず、その貢献は医学部創設に限らなかった。広く近代の教育制度創始と関わる国務が京阪神で待っていた。

大阪は学問が盛んな地であり、江戸末期になると緒方洪庵の塾、適塾なども現われていた。政治家としての小松は大政奉還の役割では土佐藩の後藤象二郎（一八三八－一八九七）と併称されるところだが、彼らは官選時代の大阪府知事（府事管理）であった[21]。初代は公家の醍醐忠順（一八三〇－一八九〇）で在職期間はおよそ二〇日間であり、これに続いたことになる。小松・後藤の在職時代に大福寺（東区上本町四丁目）に浪華仮病院及び医学校が創立されている。院長は洪庵二男の緒方惟準であった。その後、幾多の変遷を経て現在の大阪大学医学部に至る[22]。

小松の場合、この大学だけでなく、別の学校もまたこの地に関わる。さらには大阪に留まらず、京都の地とも関わる広域性を有する学校制度となるのだが、この場合、彼と何礼之（がのりゆき。或いはがれいし）という人物の関係が重要となる。両人は明治になる以前から極めて昵懇の間柄となっていたように思われる。これもやはり小松が長崎との縁が深かったことが大きいであろうし、何自身、薩摩藩との縁が浅くなかった。

先ず何礼之（一八四〇－一九二三）について簡単に述べておきたい。彼は唐通詞の子孫であったが、安政五年、一八五八年、幕府創設の長崎英語伝習所で学ぶことになるひとりであり、また後には教師ともなった。教師は英国人のほかに長崎海軍伝習所のオランダ人も務めていたが、有名な教師にはオランダ系アメリカ人グイド・フルベッキ（一八三〇－一八九八）がいる[23]。時代が西欧語取得を求めていること、中でも特に英語に特化され始めていたことを知ったことであろう。明らかに何は家学の漢語を経て蘭学へ、さらには蘭学から英学へと時代が移行していると察知したのである。

横浜鎖港談判使節団として知られる遣欧使節団の正使池田長発（ながおき。一八三七－一八七九）とその一行が文久三年、一八六三年、フランスに向かう船に、何は通訳官として同乗することになっていた。池田は一八三七年生まれだから、まだ二七歳の時である。小松であれ、池田であれ、今日から見ると信じられないくらいの若さで地位ある者たちは大役を引き受けている。最終的に何はこの一行に加わることができなかった。遠く長崎から出港地の江戸に向かった船が間に合わなかったからである。これにより池田は通訳を一人欠くこととなり、現地で不自由はなかったのであろうか。

ハプニングはこれだけではなかった。出港後に寄港した上海では、薩摩英学の先駆者で長崎滞在が長く、日本脱出を図っていた上野景範（一八四五－一八八八）が乗船を懇願するということがあった。むろん上野の願いは聞き入れられず、訪欧は叶わなかった。明治維新後、上野は新政府に徴用され、外国事務局御用掛に任命され、明治一〇年代前半までの目覚ましい外交官としての彼の活躍が始まるのである[24]。

何も亦、明治維新後にいわゆる岩倉使節団に加わり、欧米見聞を果たすことになるのだが、その直前までの活躍が目立つ。しかも余命いくばくもなかった小松との関係が深く、注目される。新政府の開成所御用係、訳官となったのち、明治元年七月、小松に随行して京摂に出向くよう命じられた。さらに外国官（外国事務局の後身で、現外務省の前身）で小松らを補佐する一等訳官（明治元年九月六日）となった。

この時の何の任務は、新政府が英国オリエンタルバンク（東洋銀行）に対して横浜税関を抵当に入れた上で洋銀三万元を借用する交渉の際の通訳と、その契約書の作成にあったようである[25]。オリエンタルバンクとの約定には小松らの名はあるが、何の署名はない。この頃フランスは小松らの新政府に対して、前政権の幕府が借用した金の返済が不可能であれば、こちらの援助でできた横須賀・横浜製鉄所を差し押さえると通告してきた。小松らは英国からの借用金をフランスへの借金返済に廻して事態を解決した。小松は借用金の一部は「京摂御用」に持参すると大久保あての書簡で明言している。彼はこれをこののち神戸で兵庫県知事伊藤俊介（博文）に託している[26]。

小松の前に再び上方が新教育の地として立ち現れる。病の身ながら、ほかの要人と同様、幾つかの役を熟（こな）さなければならなかった小松は新時代には人材の育成が欠かせないと判断し、京摂間に日本にはなかった最高学府としての大学校を構想し、それが可能かどうかを何に探るよう命じた。何自身も造幣局権判事を兼ねていた。語学力を活かし、

必要あって大阪に私塾の瓊江塾を開いた何は、他方で大阪府に公的な洋学校創設を発議する。発議から一月後の明治二年九月二二日、授業兼務を兼ねた校長（大学少博士、大坂洋学校取締）に何礼之がなり、府立大坂洋学校が開校した。『経済便蒙』、『西洋法制』の二書が翻訳出版された。教科書となったのであろう。

大学校は結局東京に設けられることとなり、大学の要員となるよう内旨をもらっていた何ではあるが、関西、京摂間に最高学府をという小松との約束を果たすために出国するまで京阪の地に留まりたいと内請した。天は何に近代化日本のために長命を与えたように思われる。その後の何はモンテスキューの古典『法の精神』などの翻訳で知られるように、さらに顕著な功績を挙げ続けた。

（五）小松帯刀と舎密、水雷術―近代科学との出会い

二〇一三年の大河ドラマ「八重の桜」で会津人山本覚馬（一八二八－一八九二）の『管見』が物語の筋のなかで割と大きく取り上げられていた。それに劇的に対応したのは西郷隆盛であり、小松の「こ」の字も出てこなかった。実際は京都の薩摩藩邸に覚馬が幽閉された時はこの屋敷の長として家老の小松帯刀がいたのであり、この『管見』に注目したのは小松であった[27]。山本は同志社英学校開設に関わるが、この地は薩摩藩邸があったところであり、今同志社大学には藩屋敷のことが記された案内板がある。

現在京都にある大学のうち同志社創設に小松は関与してはいないが、旧制の第三高等学校、現在の京都大学創設にはその名を見出すことができる。その出発点は大阪にあった。この三高創設に関わる好サイトがある。一九三一年生まれの日本中世史家上横手雅敬京都大学名誉教授の手になる文で、小松の名前と何の活躍を知ることができる。旧制三高と京都帝国大学の相違が歴史的に記されており、上横手の世代はまだこの旧制高校があり、その最終段階を迎えていたためにその終焉記ともなっている[28]。

この三高が舎密局と関わることがまた時代の特徴を明示しているであろう。舎密局の舎密（せいみ）とはオランダ語chemieの音訳であり、宇田川榕菴（一七九八－一八四六）が『舎密開宗』と題して以下の書を翻訳したことに始まる。それは一八三〇年代後半のことで、原書は英国人ウィリアム・ヘンリーが一七九九年に書いた*Elements of Experimental Chemistry*のオランダ語版であるが、単なる一訳書ではなく、宇田川自身の知見も多く含まれている。そして他の関連外国書も参照されていて、日本における化学の新出発点となった。そして幕末期の長崎海軍伝習所などでも広く使われた[29]。

公的な舎密局の歴史は以下のとおりである。元来幕府の開成所内に理化学系の教育機関、理化学校を設ける構想があったが、江戸、東京が幕末維新の戦闘を伴う混乱のため、明治元年、一八六八年、大阪に施設を移転し、オランダ人化学教師クンラート・ヴォルテル・ハラタマ（一八三一－一八八八）を教頭とする大阪舎密局が開校した。移転等については小松がハラタマらと会談して決めたことであった[30]。時に明治二年五月一日、西暦で一八六九年六月一〇日である。五月一日は第三高等学校の創立記念日となり、記念祭として祝われる。この時、ハラタマは来賓と聴衆の二百名を前に開校演説を行った。それは後に翻訳されて「舎密局開講之説」として出版された[31]。

本論でしばしば言及してきたように大阪を根城にしていた小松の役割は非常に大きかった。局は学校を意味する。小松の名がこうして大阪舎密局に端を発する第三高等学校の始まりに現れることとなる。上横手は大阪に留まった何の努力を讃えているが、小松帯刀の名も忘れ

ていない。この時代は官庁名と同様、学校名も複雑な経緯を辿って変遷していくが、始まりの根元は明瞭であった。大阪の地で学んだ生徒の一人を挙げておこう。適塾、大阪医学校、大阪舎密局で学んだ早熟の天才高峰譲吉（一八五四－一九二二）である。彼が長崎に留学したのは僅か一二歳の時であった[32]。

既出の長崎海軍伝習所（第一次団長ペルス・ライケン、第二次団長ファン・カッテンディーケ）の付置機関として医学伝習所があり、オランダ軍医ヨハネス・ポンペ（一八二九－一九〇八）が教鞭を取った。来日したのはファン・カッテンディーケの時であった。ポンペは病院の必要性をも提言し、やがて実現した。この時、ポンペを助けていたのが師事していた松本良順である。さらにその病院、長崎養生所にポンペの後身として来日することになるのが、アントニウス・ボードウィンとなる。このような長崎の西欧医学の伝統はキリシタン時代の南蛮学に遡及できるのかもしれない[33]。

先のハラタマはこのボードウィンから招聘され、理化学の発展に寄与することになる。繰り返しになるが、大阪で病身の小松を診たのがこの医学者ボードウィンであった。小松は医療診察を受けながら、近代科学導入の重大性を痛感し、これを学び、取得する教育の意義を人一倍深く熱く考えたことであろう。なお弟アルベルトゥス・ヨハネス・ボードウィンは駐日オランダ領事であり、兄より先に長崎出島に来ていた。ともにまだ江戸時代のことであり、兄が長崎に来るのは一八六二年のことである。

ボードウィン兄弟が長崎に来日した一八六〇年代は小松帯刀の行動が著しかった時代であり、小松のすべてはこの十年に集約されていると言ってもよい。一八七〇年の年は迎えることができたが、七〇年代のこの最初の年の夏に命が尽きた。七月一八日のことである。その六日前、太政官から全快次第、東京在住を命じられていた。維新後、横浜、東京で国務に就き、アーネスト・サトウや勝海舟に会ってもいた。だが、終焉は大阪の地となった。

これらの地での小松の活動は、病が重くなる前に長崎や地元鹿児島の地で育まれた人間関係の延長であった一面がある。文久元年、一八六一年、水雷術などの知見を得るべく長崎に出張したことは、その画期となった[34]。以前の江戸滞在とは異なる体験を小松にもたらした。帰藩後、水雷実験を行い、また間もなくして起こる薩英戦争では水雷が設置された。理論知が実用知と結合したところに科学の威力があり、こうして戦術にも活用される。

小松と同年生まれで、越後の豪農出身で幕臣となって前島姓を名乗る密（一八三五－一九一九。上野房五郎、巻退蔵とも）はきわめて進取の精神の持ち主で、学ぶためならば、江戸と言わず、函館と言わず、神出鬼没の行動を取った。長崎にも縁があり、何礼之の私塾で学んだ誼で、薩摩の藩立開成所で英語を教えてもいる。慶応元年、一八六五年のことである。この開成所は島津斉彬の遺志に基づいて、小松が大久保一蔵（利通）や蘭学者石河確太郎らの協力のもと実現したのであった[35]。前島は何と違って学者風でなく、志士風情であった。「自叙伝」の一節からもその様子が伝わってこよう。文中の小松太夫はもちろん、小松帯刀のことである。

> 余は鹿児島に在留する殆ど一年、小松太夫等国老の招きを受くる数回に及び、且つ其他の志士と接して藩情を問ひ、其趨勢を察するに大勢討幕に決せるが如し。[36]

前島は開成所を去ったあと、揉め続けた兵庫（神戸）の港が開港す

るや、始めは兵庫奉行の手付出役、程なくして兵庫奉行支配指定役となり、神戸の港湾事務に精励することになる。身分間が流動的になり、既成の枠に捉われず、才ある人手を求めてやまない社会が現出していた。前島はそのような時代の代表的一人であろう。「郵政の父」では捕捉できない、前島の半生があった。

江戸末期の開港地としてもっとも往来の激しい国際港となったのは、ほかでもなく長崎の港であった。それはそれまでの出島の伝統があったればこそのことであろうし、この地で蘭学から英学への移行の様子も窺われ、時代は急速に転換する[37]。学知に留まらず、政治の一舞台となったのもここ長崎であったことに贅言は要さない。当地での薩摩藩・長州藩間の和解に小松は一役買い、それが幕府倒壊に結び付いていく。維新後は大阪や東京、横浜に檜舞台が移り、辺陲の地になろうとも、維新の初期の頃までは着実に長崎で培われた人材や人間関係が継続しており、本論に名が出た人物たちにこのことを確認した。小松はこの地の「フルベッキの学校の卒業生」[38]では決してなかったが、彼の力となる人間関係は崎陽の賜物であった面は否めないであろう。

付記。本論で「舎密」に言及した。また本論で名を出した上横手雅敬がこれについて興味深いことを書いているので、まず引用する。現れるサイトは注で挙げたhttp://www2s.biglobe.ne.jp/~tbc00346/component/seimikyoku.htmlである。

舎密局の名称は、オランダ語chemieの発音を漢字で表記したもので、はじめて、江戸後期、文政十一年（一八二八）宇田川榕庵が用いた。舎密局という機関は、慶応二年（一八六六）長州藩に設置されたのが最初である。ところが一方では中国から伝わった化学という言葉も行われるようになり、この方は日本では万延元年（一八六〇）川本幸民が『化学新書』ではじめて用いた。榕庵はもとより幸民も、わが国化学研究の先駆者であった。舎密局が開かれた明治初年には、「舎密」はやや古くさい用語となっており、ハラタマの「舎密局開講之説」にしても、タイトルこそ「舎密局」であっても、講演内容の方では、訳者三崎嘯輔（舎密局大助教。明治五年東大医学部の前身「大学東校」に移り、同年二六歳で没）は「舎密」の訳語を用いず、化学で通している。舎密局がだれの命名かはわからないが、幕末に（江戸の［引用者補足］）開成所に置かれる筈であったのは、理化学校（理化は物理・化学の意）である。「舎密」という言葉が古色である上に、この学校で教えるのは化学だけではないところから、やがて理学校と改称されたのである。

今日、科学史家でロバート・ボイル研究の第一人者プリンチペ（L.Principe）は化学、ケミストリー以前の学問領域を表すために「キミストリー」を使っている。錬金術との関連からである。「舎密」は「化学」（漢語）同様、江戸時代から日本では使用され始め、今では「舎密」のほうは死語となっているにしても、日本での近代科学草創期の歴史を回顧、省察するうえで語法に注目することは意義深いことであろう。プリンチペ『科学革命』菅谷暁、山田俊弘訳、丸善出版、二〇一四年、訳者（山田俊弘）あとがき。次の書もなお有益。富成喜馬平『日本科學史要』弘文堂書店、一九四一年、再版。

【注】

1 ヴィレム・ホイセン・ファン・カッテンディーケ『長崎海軍伝習所の日々 日本滞在記抄』水田信利訳、平凡社東洋文庫、二〇一四年初版第二四刷、一六〇頁。ファン・カッテンディーケにはイタリア文を出している個所もあり、彼とイタリア（人）の関係がどのようであったのか、後考を待ちたい。

2 根占献一「小松帯刀とカヴール―一八六〇年代の日伊関係」『日伊研究』第二六号、一九八八年、四三－五四頁。同上「小松帯刀とその時代―特に「外国交際」の観点から」『学習院女子大学紀要』第一一号、二〇〇九年、七一－九一頁。

3 石河については『尚古集成館紀要』http://www.shuseikan.jp/about/public02.html に芳即正の論考が所収（二〇一八年一〇月二七日）されている。

4 丸山真男「近代日本思想史における国家理性の問題」『忠誠と反逆―転形期日本の精神的位相』所収、ちくま学芸文庫、二〇一四年、二三九－三二五、特に二五一頁。周圓「丁韙良『万国公法』の翻訳手法―漢訳『万国公法』一巻を素材として」一橋法学、一〇（二）、一橋大学機関リポジトリ。

5 川尻文彦『万国公法』の運命―近代における日中間の「思想連関」の観点から」愛知県立大学外国語学部紀要第四九号（言語・文学編）、愛知県立大学学術リポジトリ。

6 『萩原延壽集二陸奥宗光』朝日新聞社 上巻、二〇〇七年、二一五頁。

7 根占「小松帯刀とその時代―特に「外国交際」の観点から」七一－九一、特に八五－八六頁。高村直助『小松帯刀』吉川弘文館、二〇一二年、二五三－二五五頁。

8 丸山真男「福沢諭吉の哲学」『福沢諭吉の哲学 他六編』所収、岩波文庫、二〇一五年、六六－一一八、特に七四頁。

9 ここで否定される儒教主義と、小松の引用に見られる朱子学の傾向とがどのように時代に対応したか、しなかったかは、後考にゆだねる。

10 アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』坂田精一訳、岩波文庫、（上）、二三七－二三八頁。Earnest Satow, *A Diplomat in Japan*, London, 1921, p.188.

11 松沢祐作『重野安繹と久米邦武―「正史」を夢みた歴史家』山川出版社、二〇一二年。本書で重野に関わる記述では薩摩藩家老では岩下方平が目立っているかもしれない。岩下の登場は病弱な小松の代替をした側面があるであろう。

12 高村直助『小松帯刀』、二四八－二四九頁。

13 川添昭二『九州史跡見学』岩波ジュニア新書一六二、一九八九年、岩波書店、一七八－一七九頁。

14 大久保利謙「五代友厚の欧行と彼の滞欧手記「廻国日記」について」『大久保利謙著作集』、第五巻「幕末維新の洋学」所収、二八一－三一六、特に二八二－二八六頁。この件での小松の提案に関して、大久保は注二四に挙げる論文でも言及している。上海と長崎の関係、また五代の上海滞在経験から言って、無理な案ではなかったことが注意されるべきであろう。

15 薩摩藩からの海軍伝習所への藩外留学生の人数とその名前は、芳即正「薩摩の洋学―蘭学の発達」『薩摩と西欧文明―ザビエルそして洋学、留学生』第一章、ザビエル渡来四五〇周年記念シンポジウム委員会編、南方新社、二〇〇〇年、七－四五、特に四一－四三頁。二八名という。

16 藤井哲博『長崎海軍伝習所―十九世紀東西文化の接点』中公新書、一九九一年、四七頁。

17 楠本寿一『長崎製鉄所―日本近代工業の創始』中公新書、一九九二年。

18 楠本、前掲書、一一四、一四五、一五三－一五九、一八五頁。

19 古谷昌二編著『平野富二伝 考察と補遺』郎文堂、二〇一三年、一二七頁。本木の新街活版所で印刷された『長崎新聞 第四號』に用いられた活字の版下は池原が揮毫したという。実兄枳園もまた書家として知られる。

20 以下の「古谷昌二ブログ」による。http://hirano-tomiji.jp/archives/date/2018/08?fbclid=IwAR2R3J769wWqSHpC-Kb8V1jNuOK3KoAqSidxA1nyBc53S4ySqRwI89Q56MM（二〇一八年一〇月二四日）

21 高村直助『小松帯刀』、二三八頁、では小松は辞退とあるが、分かりづらいので、このまま知事としておく。

22 「大阪大学適塾記念センター」http://www.tekijuku.osaka-u.ac.jp/tekijuku/relation.（二〇一八年一〇月二四日）。なお大阪市立大学の前身創設には五代友厚が関わってくる。

23 地元からの発信に「フルベッキ研究会」https://www.facebook.com/verbeck.jp/ があり、そのメンバーのひとりは石田孝氏である。

24 大久保利謙「幕末の長崎と上野景範―長崎と薩摩の英学文化交渉史断片」『大久保利謙著作集』、第五巻「幕末維新の洋学」所収、三一七－三四三、特に

二八五－三三五、三四〇－三四一頁に詳しい。また鹿児島県立短期大学地域研究所研究紀要には然るべき論文が少なからず見いだされる。

25 現在ならば職掌が分担されているのだろうが、能力があれば、何役も熟さなければならなかった時代であったし、語学研修、「英語稽古」自体、財政知識などの実用知を学ぶことも兼ねていたように思われる。大久保利謙「幕末英学史上における何礼之－とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流」『大久保利謙著作集』、第五巻「幕末維新の洋学」所収、三四四－三六七、特に三四九頁。

26 高村直助『小松帯刀』、二四〇－二四四、二五〇頁。横浜ではフランス人医師の診察を受けながら、国務に励んでいる。

27 京都産業デジタルアーカイブhttp://www.joho-kyoto.or.jp/~wazaden/hito/yamamoto.html（二〇一八年一〇月二七日）

28 「古い同報会誌から」http://www2s.biglobe.ne.jp/~tbc00346/component/old_book.html（二〇一八年一〇月二六日）。

29 楠本寿一『長崎製鉄所』、五九－六一頁。

30 高村直助『小松帯刀』、二五〇頁。

31 以下のサイトにハラタマの開校演説が引用されている。http://www2s.biglobe.ne.jp/~tbc00346/component/seimikyoku.html（二〇一八年一〇月二六日）。

32 『三枝博音著作集』第九巻、技術家評伝 高峰譲吉、一九六九年、四五〇－四五六、特に四五一頁。

33 ポンペ『日本滞在見聞記―日本における五年間』沼田次郎・荒瀬進訳、雄松堂出版、一九八八年、第五刷。関連情報は、オイレンブルク『日本遠征記』下巻、中井晶夫訳、雄松堂出版、一九八六年、第五刷、にも見られる。中西悟『長崎のオランダ医たち』岩波新書、一九七五年、の記述は南蛮医から始まる。この時、小松は北郷作左衛門（久信）と同行するというのが、瀬野富吉『幻の宰相小松帯刀伝』小松帯刀顕彰会、一九八五年、上巻、四七頁、高村直助『小松帯刀』、二五－二六頁、である。宮澤眞一『波うちぎわのSatsuma奇譚』高城書房、二〇〇九年、一五三－一五六頁、では両人に同行した者まで詳しい言及がある。大久保「五代友厚の欧行と彼の滞欧手記「廻国日記」について」、二八三頁では、小松と石河確太郎等が派遣とあり、北郷の名はない。なおこの石河については、大久保利謙「幕末の薩摩藩立開成所に関する新史料―薩摩藩の「一藩割拠」主義政策の一環」『大久保利謙著作集』、第五巻「幕末維新の洋学」所収、二六一－二八〇頁、参照。

35 犬塚孝明「近代西欧文明と鹿児島―英学移入から留学生派遣まで」『薩摩と西欧文明―ザビエルそして洋学、留学生』第二章、四七－八一、特に六二頁。森重孝『薩摩医人群像』春苑堂書店、一九七六年、一四六－一五〇頁、には開成所全般の記述が見られるが、本書は表題以上に幕末・明治期の政治史の変遷をも追っている。徳永和喜『薩摩藩対外交渉史の研究』九州大学出版会、二〇〇五年、の第四編は薩摩藩の通詞制度を史料中心に学術的に扱っている。本書は日本史の研究書に多く見られるように索引がない。このため犬塚が指摘している「小松帯刀」らの名が出てくるかどうか、精確には不明であるが、眼を通した範囲では彼の関与は確認できなかった。

36 前島密『鴻爪痕』、大正九年四月刊。大久保「幕末英学史上における何礼之－とくに何礼之塾と鹿児島英学との交流」、三六〇頁の引用による。

37 鳥井裕美子「福沢諭吉―蘭学を洋学に開花させた啓蒙思想家」、W・ミヒェル他共編『九州の蘭学―越境と交流』所収、思文閣出版、二〇一一年、三五二－三五九、特に三五六－三五七頁、と比較参照。ほかに本書には松木弘安（寺島宗則）など本論に名が出る多くの関係者が取り上げられている。

38 ジョン・バワース『日本における西洋医学の先駆者たち』金久卓也・鹿島友義訳、慶應義塾大学出版会、一九九八年、二二八頁。

（本学教授）